

フィリップ・スクラントン著（廣田義人・森泉・沢井実・植田浩史訳）

『エンドレス・ノヴェルティ：
アメリカの第2次産業革命と専門生産』

谷口 明丈（Akitake TANIGUCHI）

東北大学大学院経済学研究科

本書は1997年に刊行された Philip Scranton, *Endless Novelty: Specialty Production and American Industrialization, 1865-1925* の待望の翻訳書である。

冒頭に述べられているように「本書は、合衆国における第2次産業革命の歴史、すなわち1870年以降半世紀に及んだ生産能力と組織形態の画期的な変化の実像を、練り直し書き直そうとした努力の所産であり、その練り直し書き直しを「わが国で広く知られた大株式会社がマス（大量）生産を達成するのと並行し補い合い、時に対抗しながら、特定専門的な製造活動が展開したという、その産業面と制度面のダイナミズムに立ち入って」行おうとするものである。「専門製造部門は、マス生産を可能にする機械設備を提供し、また各種の流行商品によってアメリカ消費社会を引き立たせたばかりではない。同時にマス生産の反復的な組立作業、官僚制的な管理、寡占的な競争の創出とは違う、そして重要性においてそれに劣らない、技術と組織の変革をも先導した」（以上の引用はすべて1ページから）というのが著者の主張である。このような主張は、アルフレッド・D. チャンドラーに代表してみられるような、「これまで研究者の関心が巨大経営者企業と大量生産システムにばかり偏してきたことに異を唱え」（27ページ）るものであった。

著者はかつて、本書の原型をなすといえる論文（“Diversity in Diversity: Flexible Production and American Industrialization, 1880-

1930,” *Business History Review* 65 (Spring 1991)）で「チャンドラーの研究戦略が、アメリカ産業の主導力がその絶頂に近づいたときにその起源を追求しようとしたものであったとすれば、私自信の仕事は、より最近のジレンマと衰退によって条件付けられているのである」（p. 88）と述べていたが、その点からも、本書は、クラフト生産システムと大量生産システムとの対抗の構図を提起したピオリとセーブルの『第2の産業分水嶺』と同じ傾向を示す研究として分類されることもあった。しかし、本書は、後者のようにクラフト生産システムにロマンチックに思いを寄せるものではなく、「リアリズムに高い価値を与え」、「相違と細部と例証をゆるがせにしない歴史家になう記述」（I ページ）となっている。

本書の構成と内容を簡単にみておこう。

第1章（序論）では、商品を製造して需要に対応する事業の仕方を、注文＝カスタム生産、小ロットのバッチ生産、大口のバルク生産、大量＝マス生産の4つのアプローチに分類し、前2者を柔軟な専門生産、後2者をルーチン型生産と括り、さらに両者の混合型を想定している。専門生産はきわめて多様なあり方をとるが、そこから産業クラスターの中核となる「統合拠点企業」、生産と販売を組織化するために相互の密接な接触や提携に依存する「ネットワーク化された専門業者」、中間製品やサービスを提供する「関連支援専門業者」という3つの範疇を抽出している。さらに、混合生産をする

巨大企業を「ブリッジ企業」として、これも分析の対象に加えている。

第Ⅰ部（前史）では、専門生産が全盛だった19世紀中葉の所有者企業を明らかにするため、第2章（1876年までの専門製造業）で機械製造業について、第3章（専門生産のための制度と条件）で、専門生産を支えた制度と条件についての分析がなされている。

第Ⅱ部（フィラデルフィア独立記念万国博からシカゴ大陸発見記念万国博まで：1876年～1893年の専門生産者）は、専門製造業が高度化していく有様を扱っている。第4章（1876年万国博とフィラデルフィア製造業）ではこの地の金属加工と繊維産業を、第5章（プロヴィデンスとニューヨーク）では宝飾品、銀製品、印刷を、第6章（中西部の専門製造業者）ではシンシナティの工作機械とグランド・ラピッツの家具を分析したのち、多様性を示すこれらの事例に一定の枠組みを与えようと試みている。ここで興味を引くのは、専門生産が展開する都市のパターンを、専門生産諸部門が相互に関連しあう相関都市、複数の傑出した専門生産業種が並列的に展開する並列都市、専門生産がバルク生産から派生的に生まれた派生的都市、1、2のバッチ生産品目が重要な成長ベクトルを与えるような専門的都市という4つの類型に分けていることである。

第Ⅲ部（不振と発展：1893年～1912年）は、1890年代の不況の影響と、その後1912年までの新たな拡張、技術のシフト、事業実践の変化がもたらした影響を検討している。第7章（シカゴとグランド・ラピッツ）では前者の豪華客車と後者の家具を、第8章（工作機械のハブの形成）ではシンシナティを、第9章（東部へ戻る）ではゼネラル・エレクトリックとウェスティングハウスの巨大ブリッジ企業を、第10章（プロヴィデンスの迫り来る危機）では宝飾品を、第11章（世界の工場）では専門生産の成熟した姿を見せるフィラデルフィアを分析している。

第Ⅳ部（分かれ道：1913年～1925年）では、第12章（戦争、不況、そして1920年代に入った

専門生産）で1920年代の専門生産の変化をプロヴィデンス、シンシナティ、グランド・ラピッツで検討した後、第13章（展望）でその後の専門生産の運命、とくにその衰退過程を展望し、結論を与えている。

本書の構成と内容を概観しただけで、本書が広大な時空をはばたき、多様な産業を股にかけた一大パノラマであることが理解できるであろう。そればかりでなく、それぞれの時間、空間、産業で扱うテーマは、企業者、市場関係、マーケティング、労使関係、業界団体、技術、教育、政府への対応など、きわめて多面的である。我々は本書によって、従来のアメリカ産業史では見ることのできなかった、アメリカ産業発展の多様なあり方をいやと言うほど眼前に突きつけられることになったのである。まさに画期的な作品の出現と評価することができよう。そればかりでなく、本書の訳者あとがきにも述べられているように、本書は、アメリカ経済史・経営史を超えて、産業集積史の国際比較や日本経済史の研究においても大きな意義をもつものと考えられる。

とはいえ、本書はその壮大な構想と内容ゆえに、当然またいくつかの重大な疑問を喚起せざるをえない。それは、本書が強調する専門生産の多様性、著者の論文の表題を借りれば、「多様性の中の多様性」が主として生み出す疑問である。以下に列挙してみる。

専門生産を歴史的、概念的に把握することがきわめて困難である。著者はそのための枠組みを2つ（専門生産の類型と都市の類型）与えてくれているが、それぞれの類型の中の事例はこれまた多様であり、「多様性の中の多様性」のなかで読者は途方に暮れることになる。これらの類型は分類の役には立つが、歴史を理解する武器にまでは鍛えられていないように思われる。

本書は第2次産業革命の書き直しを意図したものであるが、この多様な専門生産のどこがどのように第2次産業革命と関連してくるのであるだろうか。シンシナティの工作機械が大きく関連していたことは理解できるとしても、たとえ

ば、プロヴィデンスの宝飾品産業は第2次産業革命にどのような影響を与えたのであろうか。産業史としては理解できるが、革命史としてはどうなのか。

専門生産の範疇の中にありとあらゆる多様な企業を投げこんでしまうと、範疇自体が無内容になってしまわないだろうか。ブリッジ企業はもとより、ブルマンやボールドウィンも宝飾品企業と同一に論じるよりは、USスチールやインターナショナル・ハーベスターと一緒に論じる方が意味があるように思われる。そこから大企業の多様性を導き出すことができるであろう。訳者あとがきは、本書に大企業史の新しい可能性を見いだしているが、同感である。

多様性を特徴とする専門生産はいつの時代にも存在しえし、存在した。そうすると、20世紀資本主義の歴史性、あるいは20世紀アメリカの特徴を専門生産によって表現することができ

るのであろうか。20世紀になってようやく確立する大量生産と経営者企業のほうが20世紀がもつ独自の意味を表現できるのではないか。本書をくぐり抜けた上で、あらためて20世紀の意味を問う必要があるだろう。

最後に、著者が研究戦略の出発点とした「より最近のジレンマと衰退」の解明に専門生産の分析はどのように関わるのであろうか。多様性の解明と同時に、ジレンマと衰退につながる1本の糸の発見を著者に望むのは望蜀であろうか。

とまれ、著者が自負しているように、本書は「合衆国の経営史・技術史の研究に新しい可能性を注入」したことは疑いのないことである。かつて評者も原著書に衝撃を受けて、多様性の中に1本の糸を発見する方向に向かったことを、この翻訳書は思い出させることになった。

(有斐閣、2004年、430頁、4,400円)